

C 2 幼児後期の分節性発達に関する一研究 — Acceleration の視点から —
武庫川女子大 家政 前田 實子

目的： 幼児の分節性能力の発達が生物学的指標に示されると同じ発達加速現象(Acceleration)の影響を受け、分節性発達の転換期が年次的に前傾しているか否かを確かめようとする。

方法： 豊中市と枚方市の2ヶ所の幼稚園園児に隔年にケルン・甲テストを施行した。実施期間は昭和50年より55年の6年間、毎年5月10日前後である。さらに身長、体重の計測、家庭環境調査、また各担任に心理—社会的成熟調査票に記入を依頼した。

結果： (1)分節性の発達に関しては、完全分節(A)の初発年齢が年次的に前傾を示している。(2)A段階と未分節(C)および(C⁻)との交叉するいわゆる転換期も年次的に前傾を示している。(3)2ヶ所の幼稚園における結果はそれぞれ転換期の年次的前傾を示しているが、両転換期の間には若干月令差がみられる。これは各幼稚園、保育内容、地域環境、家庭環境等の複合要因の差によるものと考えられる。(4)心理—社会的成熟調査の結果、分節性の発達と心理—社会成熟度との間には相関がみられた。(5)身長は年々増加している反面、体重は3才児においては増加しているが、4才、5才児は減少傾向にある。これは第一次形態変化期の前傾を意味するものと解され、体性的Accelerationの表現であろう。(6)身長と分節性発達との間には相関は指摘されなかった。(7)両親の最終学歴と幼児の分節性の発達との間にも連関はみられなかった。(8)兄弟間の順位と分節性の発達段階とも連関がなかった。